



営農情報

第66号 平成29年12月1日

「あまおう」12月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

1 生育状況

10月、11月の低温の影響や台風襲来によるビニール被覆等の管理の遅れにより、出荷の出揃いは平年よりやや遅く、11月12日から大玉傾向で出荷が始まりました。

また、扁平の果実や先詰まりなどの障害果が散見されます。要因は定植時期～開花時期の高温・降雨が、花器の形成・受粉に悪影響を及ぼしたものと考えられます。

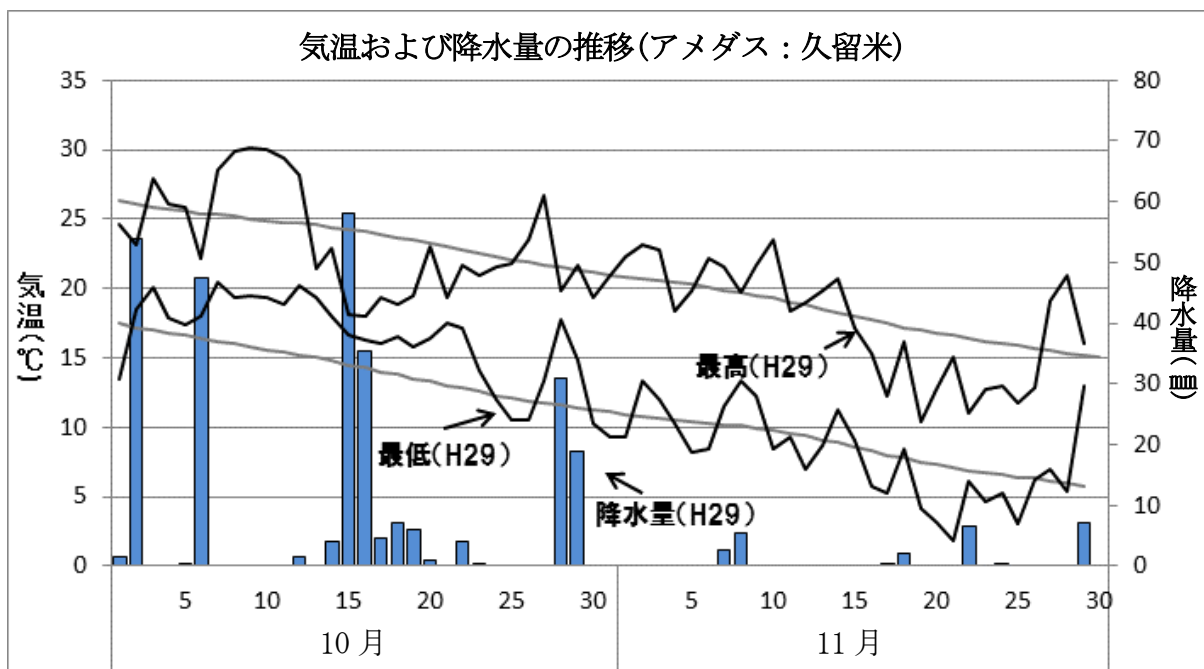


図1 気象の経過 (アメダス久留米より)

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

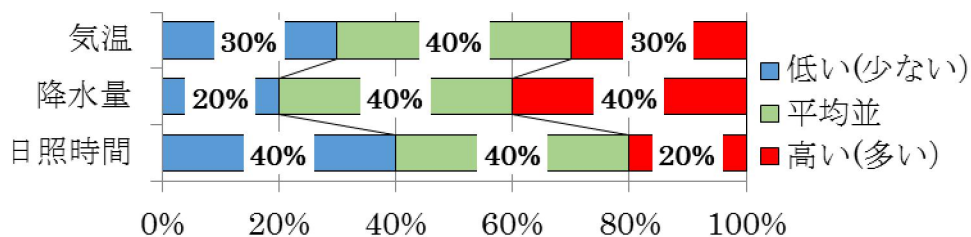


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 11月25日~12月24日 発表日11月23日)

(2) 今後の見通し

12月は平年と比べ、曇りや雨の日が多いと予想されています。このような環境では灰色かび病が発生しやすいので、注意してください。

3 今後の管理

本年は、全体的には2番果房の花芽分化はやや遅いが内葉数が少ないため、厳寒期の草勢が低下しなければ、大きな出荷の谷は生じないと考えられます。

現在、10月の日照不足・11月の低温等で生育が1週間程遅れ、株の充実も全体的に不足気味となっており、1番果房の成熟も遅れています。また、早進株の発生も例年より多い状況です。

今後、厳寒期に弱らせないこと。2番果房の生育を確保するためにも年内にこれ以上の生育遅延をさせないようにしましょう。また、1番果房の成熟状況から養分競合も勘案して急激な草勢変化がないよう管理していくことが重要です。

そのためには、電照、温度、摘果、かん水、液肥、ジベレリン、炭酸ガス施用などによって総合的に、こまめに調整して管理していくことが必要です。

(1) 温度管理

表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理 12月中旬以降はやや高めに變更
1番果房収穫終了後 2番果房出蕾～肥大期	24～28℃	5～7℃	2番果房の生育促進と、3番果の早期出蕾 を目的として高めの管理

※ 寒波が予想される場合はあらかじめ高めの温度設定にしておく

(2) 電照管理

心葉の展開位置を確認して、電照時間を調節する

- 電照の効果は1週間～10日後に現れるため、わい化してから電照時間を延長しても手遅れとなる。心葉の展開位置が、外葉より低くなり始める前に、電照時間を延長する。
- 電照時間は、2時間～4時間の範囲で調節する。
- 夜温が高いと、電照効果は高くなる。
- 厳寒期は立ち上がりすぎているようでも、電照を完全に切らないようにする。

表2 電照時間の調整の目安となる葉柄の長さ

電照時間	時間を延ばす	現状維持	時間を短くする
心葉の葉柄長	9cm以下	9～11cm	11cm以上

<3、4番花芽分化時期>

【早期作型】 3番果房：11月下旬～12月上旬 4番果房：12月下旬～1月上旬

【普通作型】 3番果房：12月上旬 4番果房：1月中旬

※花芽分化期に電照時間を延ばすと、花芽が遅れる可能性があるため注意する。

(3) かん水

かん水は少量多回数で行い、高温管理をする場合はかん水量を増やす。また、暖房機の稼働で、乾燥しやすくなるので注意する。

(裏面へつづく)

(4) 施肥

液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。

(5) 草勢維持

- ・ 2番果房出蕾期や、草勢が弱く株のわい化が予想される場合は、ジベレリンの散布を行う。
- ・ 成り疲れを軽減するために、発根促進剤（チャンス液、パフォームソイルなど）を定期的に流す。
- ・ 2番果房の出蕾状況を確認し、草勢や果房間葉数に応じて摘果を行う。
- ・ 1～2番の果房間葉数が2枚以下の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のために強めの摘果を行い、2番果房と合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。

（着果数が多い場合、小果が不受精になりやすく株も弱りやすい。）

表3 1番果房の摘果後の着果数の目安

1～2番果房間葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

(6) 病虫害防除

○灰色かび病・菌核病

- ・ 湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。
- ・ 曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用し、結露を抑える。

○うどんこ病

- ・ 通常は湿度80～100%で発生しやすいが、乾燥条件でも発生する。
- ・ 軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場ではやや低目の温度管理を行う。

※ 灰色かび病、うどんこ病は、発病部位を速やかに取り除き、ハウス外に持ち出す。

また、定期的な薬剤散布(1週間間隔)による予防に努める。

○ハダニ類

- ・ 春先の急増を予防するため、ハダニ類の活動が衰える12月に防除を徹底する。
- ・ ハウス内の乾燥しやすい場所や出入口など、毎年発生しやすい場所を特に注意して観察する。
- ・ 寄生した葉の除去はすみやかに行き、ほ場内や周辺に放置しない。

< 光合成促進装置の使用手法 >

厳寒期はハウス内温度維持のためハウスを閉め込むことによって、植物が光合成に使う炭酸ガス(CO₂)が不足して、光合成が十分にできないことがあります。

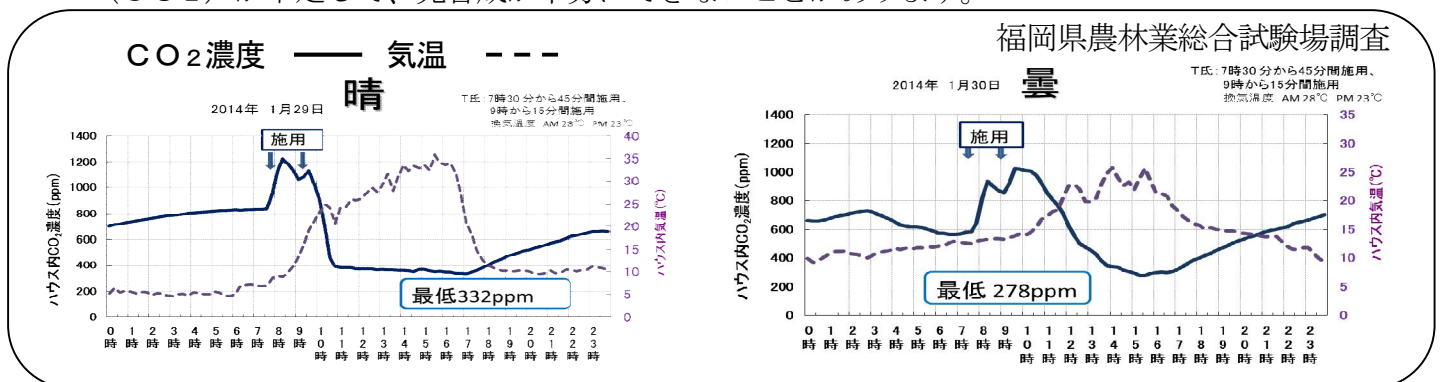


図3 炭酸ガスを早朝施用した場合の晴天日(左)と曇天日(右)のハウス内のCO₂濃度と気温の推移

“晴天日”では換気が行われるため、植物が光合成に使ったCO₂は外気より補給され、CO₂濃度は極端に低下しません。一方、“曇天日”では、ハウス内気温が上昇せず、換気が行われないため、CO₂は外気から補給されず、ハウス内のCO₂濃度が極端に低下します。

< 日中施用による増収効果 >

日中施用により、ハウス内のCO₂濃度を400ppm程度に維持(図4)することで、増収できます(図5)。

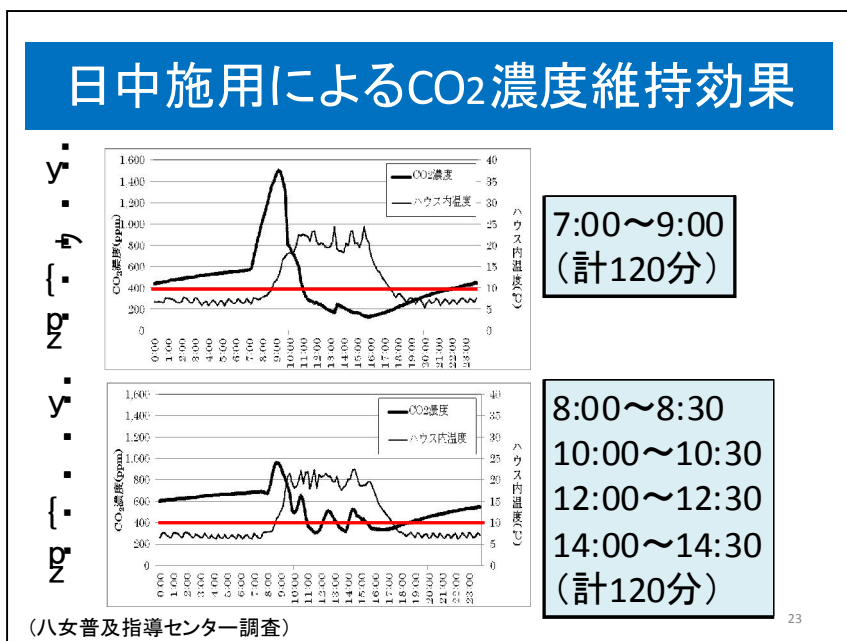


図4 日中施用によるCO₂濃度維持効果

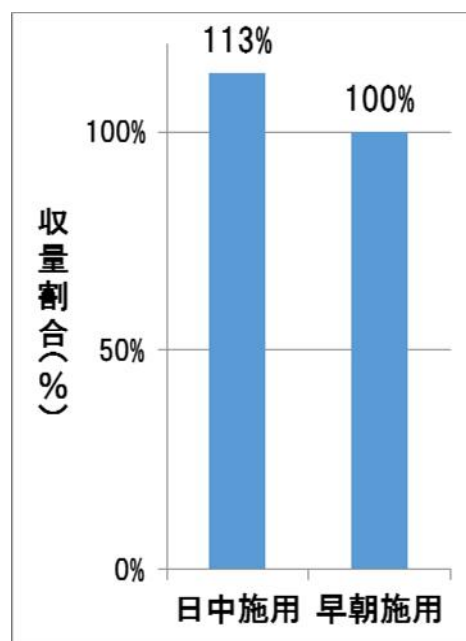


図5 日中施用による増収効果

< ハウス内のCO₂濃度を外気並に維持するためには? >

炭酸ガスを日中、定期的に施用することで、換気が行われない日中でも外気並のCO₂濃度を維持することができます。

表4 施用例

①	9:00~9:15、11:00~11:15、13:00~13:15、15:00~15:15
	(15分) (15分) (15分) (15分)
②	9:00 から 15:00 まで、1時間おきに15分

光合成促進装置を持っている方は是非、早朝施用から日中施用への切り替えを行いましょう。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!